

第 296 回くらしの植物苑観察会 2023 年 11 月 25 日 (土)

浮世絵に見る菊

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

江戸時代の菊花が描かれた浮世絵を、縁日という視点から見ていく。観察会当日は、このほか女性の菊作り、歌舞伎の菊花壇、^{しにえ}死 絵 を紹介する予定。

江戸時代の縁日に、植木は定番の品であった。菊だけに注目すると、花壇で栽培するには根巻で販売するのが理にかなっているといえるが、他の植物同様、染付植木鉢に植えて飾り立てることも行なわれた。

1. 根巻で販売

図 1 は、様々な縁日の様子をあらわした浮世絵で、浄瑠璃や歌舞伎の登場人物たちを行商人に扮装させたシリーズである。右下が菊の苗を販売している図で、中央に蠟燭が描かれていることで、夜の縁日とわかる。扮しているのは「鬼一法眼^{きいちほうげん} 三略巻^{さんりやくのまき}」の登場人物で、右から牛若丸、鬼一法眼、皆鶴姫である。大道具に必ず菊花壇が使われる芝居で、花壇に植えられている菊が赤、黄など色彩豊かに彩られていることが多い。

拡大図 (図 2) を見ると、菊花の色は黄、赤、中央が薄桃色で周囲が白と、三種類である。おそらく当時流行した江戸菊と考えられる。菊は植木鉢に植えられてはおらず、「根巻^{ねまき}」という形態で表現されている。荒縄などで根を保護して運搬の便に供した。



図 2 拡大図



図 1 「浄る理町繁花の図」
嘉永 5 年 (1852)
歌川広重画 (国立国会図書館蔵)

2. 鉢植で販売

図 3 は、中央に縁日に訪れた武家の女性が、その視線の先には文様が刻まれた染付や素焼の植木鉢が並ぶ。

右端の素焼の植木鉢には小菊が植えられ、他の菊は中菊で、染付の植木鉢に植えられており、菊に合わせて鉢の質を変えていたことがわかる。



図3「十二月の内 九月 縁日の菊」
天保14- 弘化4年(1843-47)
溪斎英泉画(国立国会図書館蔵)

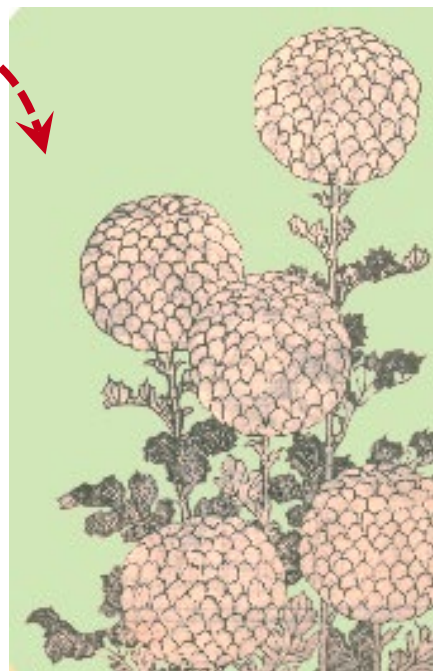


図2『菊花壇養種』黄宝珠菊
弘化3年(1846)刊 溪斎英泉画
(国立国会図書館蔵)
(花形を際立たせるため背景を変更)

左端の植木鉢の模様は、直線で凹凸を帯状に表現し、中央のガラスが割れた形は氷結文といい、いずれも植木鉢によく使われる文様である。

次に注目すべきは、右端の球状の黄菊で、同じ溪斎英斎が描いた絵入り園芸書『菊花壇養種』に描かれた「黄宝珠菊」と同一である。

同書には、

近来花壇菊に黄宝珠と云る花あり。尤奇花也。貌^{かたち}手毬の如く、大いなるは渡り五六寸ありて殊

更愛すべき菊なり。白もあり。紅も見へたり。

と、黄色だけでなく、白、赤もあったとする。

今回は、菊を縁日において販売する浮世絵だけを探り上げたが、植木の縁日の場面を描く図には一種類の植物ではなく、サボテン、オモト、梅、福寿草など多種類の植物が描かれることが多い。菊は、花壇として飾られることが圧倒的に多く、今回紹介した図は、稀な例である。

.....

次回予告 第297回くらしの植物苑観察会 2023年12月16日(土)

「サザンカを用いたツバキ属の種間雑種」

箱田 直紀(恵泉女学園大学 名誉教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要